

— NO.209 6月号

FOREST NEWS

未来を守る木を植える
未来を育てる木を植える



2025年度 指標

- ①パンタナール地域における潜在自然植生の混植密植形式の植樹の実施
- ②国内において累計500本の植樹活動
- ③植樹を通じた環境問題解決のロールモデルをつくる
- ④セミナーや植樹祭を通じて「家族で木を植える」文化の啓蒙
- ⑤混植密植の植樹を推進する他団体との連携



理事長メッセージ

日本文化の母体であり、防災の要ともなるタブノキを知ろう！

日本人の祖先は、太古の昔から森に神々の存在を見いだし、「鎮守の社」として神を祀る文化を育んできました。神道において神を数える単位「柱」は、木々に対する深い敬意と信仰の名残です。欧米が近代化の名のもとに森林を大量伐採してきた歴史の中で、日本は自然との共生を重視し、森の文化を守り続けてきた数少ない先進国ひとつです。

日本列島は照葉樹林帯に属し、カシやツバキなど艶のある常緑広葉樹が生い茂る森が特徴です。その代表がタブノキで、温暖湿潤な気候に適応し、海岸低地から丘陵地、山裾にかけて豊かな森を形作ってきました。しかし、こうした土地は人間の営みにとっても好条件であり、水田や宅地として開発されたことで、タブノキの森は著しく減少してしまいました。

このタブノキの価値を科学的視点から再評価したのが植物生態学者・宮脇昭博士です。博士は「本物の森を人が再生する植樹」を目指し、地域本来の潜在自然植生に基づ

いた「宮脇式植樹」を提唱しました。この方式は、土地の風土に根ざした複数種の広葉樹を密植・混植することで、短期間で高密度かつ多様性に富んだ森を再生させる手法です。

東日本大震災直後、博士は岩手県沿岸部を訪れ、全壊したマツ林と、津波にも耐えた南三陸町のタブノキの森を比較調査。針葉樹が浅根性で倒伏しやすいのに対し、タブノキのような深根性広葉樹が津波の力を吸収・緩和することを実証しました。これはまさに「防災林は本物の森でなければならない」という宮脇式の理念を裏付けるものでした。

東京湾に面した浜離宮恩賜庭園には、奇跡的に残されたタブノキの森があります。都市の只中にありながら、深い森の静けさを体感できるこの場所は、日本人の森に対する信仰と知恵、そして宮脇博士の精神が今なお息づく貴重な空間といえるでしょう。

— パンタナール地域初の試み

混植密植による植樹活動

2025年5月30日、南米パンタナール地域に位置するプエルトLEDAにて、混植密植方式による植樹活動が行われました。「世界の肺」と称されるこの生態的に貴重な地域において、本手法を導入するのは初の試みです。植樹は第一植樹園の東側、3m × 5m の区画に70cm の高さで造成されたマウンド上で実施されました。

①マウンドつくり



現地従業員の協力により、周辺土壤を集めて高さ70cmのマウンドを形成。少ない植樹本数でも活着率を高くするため水捌けと空気の通りを確保して根の成長を促す設計です。

②耕耘作業



LEDA現地の土壤は粘土質であるため、水はけが悪く、自然状態のままでは硬く締まりやすい性質があります。そのため、植樹前にはマウンド内部の土壤を丁寧に耕す作業が不可欠です。今回はスコップや手作業を中心に、土をしっかりとほぐし、通気性と排水性を高めるよう努めました。特に根の初期活着においては、土壤の柔らかさと養分の浸透性が極めて重要であるため、深さと幅を意識しながら作業を進めました。

③植樹種の内訳

- ・ ケブラッチョ ... 20本
- ・ ラパッチョ ... 15本
- ・ ケブラッチョブランコ ... 10本
- ・ ニーム ... 10本
- ・ タマリンドウ ... 5本
- ・ カスター二ヨ ... 5本

【植樹する注意を確認】

- ・ 1 m²あたりに4本を目安に苗木を植える
- ・ 苗木の扱いは赤ちゃんを抱っこするように
- ・ 自然界では混植密植が大原則。隣に同じ種類を植えない。苗木と苗木の間は60 cm
- ・ 苗木の掘る深さは苗木が被る+5 cm

④苗木の最後の水やり



一度地に植えられた苗木は、自ら動くことはできません。その場で風雨にさらされ、太陽に照らされながら、生涯をかけて根を張り、枝を伸ばしていくのです。だからこそ、植え付けの瞬間には深い思いやりと注意が求められます。

植樹において重要なひと手間が、「植える前に苗木に十分な水を含ませる」ことです。これは単なる作業ではなく、苗木が新しい土壤に無理なく順応し、根がしっかりと定着するために不可欠なステップです。あらかじめ水をたっぷりと与えることで、苗木はストレスなくその場の環境に馴染み、健やかに成長をはじめる準備が整います。

～LEDA植樹レポート～

⑤苗の植え付け



植え付けの際は、根鉢部分を強く押さえつけたりせず、根が自然に広がるように穴の深さと幅を調整。周囲の土を軽く手で押さえることで、空気の隙間をなくしつつ、根を傷めることなく固定するようにします。このように、苗木一つひとつに対して思いやりをもって植え付けることが、参加者の苗木に対する愛情を育みます

⑥マルチング作業



マルチング作業は、植樹後の苗木が健やかに根を張り、成長するために、乾燥を防ぎ、雑草の発生を抑えるために、土壤の表面を枯れ草などで覆う工程です。今回の作業では、現地で手に入る枯れ草を使用し、苗木の根元に丁寧に敷設しました。日射による水分の蒸発を抑えるとともに、表面温度の急激な変化を和らげることで、苗木にとって安定した環境を確保する狙いがあります。この自然素材によるマルチングは、森の再生を目指す資源循環の視点からも有効です

参加者の感想

「植樹活動とは何か」について理解するところから始めなければならないくらい、ほとんど何も知りませんでした。とにかく穴を掘って苗木を植えればいいはずだというイメージだけがありました。しかし実際にやってみると思った以上にすべきことが多く、かなりの重労働であることを知りました。苗木を準備し水につけ、穴を掘り埋める。深すぎても浅すぎてもいけなくて、斜面では苗木が斜めにならないように注意する。圧迫しすぎないように土に固定し、藁、木の枝を被せ水をかけ固定する。うんざりしてしまうほど作業工程が多く、当初持っていた植樹に対するイメージは覆されました。しかし、この活動が20年後、30年後の森をつくり豊かな生態系を生み出すのだと考えると、なぜか非常にすっきりとした気分になりました。今回の植樹活動はある意味で実験的な意味も含んでいるのだと思いますが、だからこそこの意義深い活動に携われたことを嬉しく思います。



今後の方向性

今後は今回の植樹場所の定期的なモニタリングとメンテナンスを行い、パンタナール地域の生態系再生のモデルとして貢献できるかを検証していきます。また、定期的に植樹場所を増やしていくと共に次の段階として他地域への拡張や、他団体との連携も視野に入れてながら活動場所をパンタナール・アマゾンに広げていきます。多くの方のご指導、ご協力ありがとうございました。

活動の様子は
こちらから

